

平成 25 年度学内教育 GP プログラム事業経費 成果報告書

区 分	継続型
事業名称	「格差センシティブな人間発達科学の創成」に関する教育事業
取組代表者名 担当者名	* 事業担当者は全員記入してください。 菅原ますみ（取組代表者）、浜野隆、大森美香、坂元章、榊原洋一、平岡公一、三輪建二、米田俊彦、坂本佳鶴恵、大森正博、篁倫子

1. 成果の概要

実施した事業の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、当初設定した目的・目標に照らし、3 ページ以内で、できるだけ分かりやすく記述すること。必要に応じ、図表を用いても構いません。

1. 授業実施

グローバルCOE 期間中の教育と研究の成果を学生に還元するための授業を通年でおこなった。“社会的格差と人間発達”をテーマとし、前期科目として“子どもの発達にみる格差：地域・学校・家庭”（全 15 回）、後期科目として“ジェンダーをめぐる格差の形成と構造”（全 15 回）を学部学生を対象として実施し、1 年生から 4 年生まで前期 67 名・後期 33 名の履修者を得た。授業参加者は授業テーマに関して大きな関心を示し、非常に積極的に授業に取り組んでいる。人間の発達過程における社会的格差の問題に対してセンシティブな視点を有する学生の育成に資することができたものと思われる。

【開講時間】水曜日 7～8 限（前期、後期）

【教室】共通講義棟 2 館 101 室（前期）、共通講義棟 2 号館 102 室（後期）

【履修実績】

●前期『格差社会の人間発達科学論 A：子どもの発達にみる格差：地域・学校・家庭』

<履修者数>

- ①格差社会の人間発達科学論 A：25 名
- ②教育科学特殊講義Ⅳ：19 名
- ③社会意識論：19 名
- ④社会心理学特殊講義Ⅳ：4 名

計 67 名（1 年 19 名、2 年 26 名、3 年 11 名、4 年 11 名）

<講義内容>

- ①ガイダンス
- ②青少年有害情報対策から読み解く「子どもとメディア」
- ③開発途上国の子どもたちの養育環境と QOL
- ④モバイル社会における“ネットいじめ”の現状と教育的介入の課題
- ⑤養育環境の心理学的検討：環境心理学の視点から
- ⑥6. GCOE 学校調査に見る中高生の格差（Ⅰ）：統計的に差を捉えるとはどういうことか
- ⑦GCOE 学校調査に見る中高生の格差（Ⅱ）：個人差と学校間差を分離する
- ⑧GCOE 学校調査に見る中高生の格差（Ⅲ）：QOL の時系列的な変化の差を捉える

- ⑨養育環境における格差と子どもの発達
- ⑩日本の子どもたちの養育環境と QOL
- ⑪子どもの健康とメディアリテラシー
- ⑫進路選択と格差の形成
- ⑬学部生の進路選択ーキャリア指導の役割を考える
- ⑭⑮シンポジウム「教育格差の社会学」講演者：耳塚寛明

●後期『格差社会の人間発達科学論B～ジェンダーをめぐる格差の形成と構造』

<履修者数>

- ①格差社会の人間発達科学論B：15名
- ②教育科学特殊講義Ⅰ：16名
- ③臨床心理学特殊講義Ⅳ：2名

計33名（1年19名、2年10名、3年1名、4年3名）

<講義の内容>

- ①ガイダンス
- ②日本の近代化とジェンダー
- ③近世女性の日記・書簡にみる人間観・ジェンダー観
- ④子育てをめぐるジェンダーの問題
- ⑤職業生活と家庭生活：養育者を取りまく環境
- ⑥教育機会とジェンダー～中国教育の発展と現状から
- ⑦途上国における女子教育
- ⑧ジェンダー・開発・エンパワーメント
- ⑨ジェンダーと経済学
- ⑩高齢期のジェンダー格差
- ⑪年金制度とジェンダー
- ⑫女性の社会保障：国際比較と今後の展望
- ⑬近代日本の権力構造とジェンダー～公と私の関係めぐって
- ⑭⑮シンポジウム「日本の社会保障制度改革とジェンダー平等」講演者：平岡公一

2. 国内シンポジウム開催

上記1の前期・後期授業の一環として、社会的格差と人間発達との関連性に関する国内外の調査研究の発信を目的とするシンポジウムを企画・実施した。

<学内公開シンポジウム>

●前期シンポジウム『教育格差の社会学』

【日時】平成25年7月17日（水）15:00～16:30

※前期授業の一環として実施（学内公開）。

【場所】お茶の水女子大学共通講義棟2号館101号室

【基調講演者】耳塚寛明先生（お茶の水女子大学副学長・理事）

【その他登壇者】菅原ますみ、前期担当講師

【概要】講演では、まず、前期の授業で扱ったさまざまな“格差”についてふれ、学力の社会学をふりかえり、日本の学力格差を概観した。次いで、教育格差に迫るための論

点整理として、①社会学は「学力」にどう接近できるか、②「格差」を成立させるパースペクティブ、③なぜ学力（教育）格差は「the 格差」であるのか、④学力格差を説明する理論仮説、⑤私たちはどんな社会を目指すべきか、⑥もはや人々は機会の平等を理念として追求すべきとは考えていないのではないか、という6つの視点からの展望が示された。

●後期シンポジウム『日本の社会保障制度改革とジェンダー平等』

【日時】 平成26年1月22日（水）15:00～16:30

※前期授業の一環として実施（学内公開）。

【場所】 お茶の水女子大学共通講義棟2号館102号室

【基調講演者】 平岡公一先生（人間文化創成科学研究科教授、人間発達教育研究センター長）

【その他登壇者】 菅原ますみ、後期担当講師

【概要】 講演では、まずジェンダーアプローチによる比較福祉国家研究の動向、および日本におけるジェンダー政策の展開と枠組みが示され、現行のジェンダー政策が少子化対策の枠内のみで行われている点について問題提起があった。次いで、女性の年金、ひとり親世帯、児童・子ども手当という三つの領域における社会保障制度の問題点が明らかにされた。

3. 子ども期の発達と社会的格差との関連に関する縦断データベースの管理

グローバルCOEに収集された思春期（中学1年生～高校3年生、3,227名）のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）に関するデータベースの解析を進め、成果の発信をおこなった。また、教育格差に関する青少年期から成人期への移行についての追跡的研究である”JELS（Japan Education Longitudinal Study）”（研究代表：耳塚寛明）や、科研費（基盤A）による“生涯発達におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康”（研究代表：菅原ますみ）による当該テーマに関する長期縦断研究の追跡調査等のさまざまな発達追跡研究を展開し、各種学会発表、学会誌投稿、単行本の発行などの発信をおこなった。

4. 人間発達研究を展開している他の研究拠点との交流

関連機関の情報を収集するとともに、人間発達教育科学研究センターの研究紀要に本事業の活動内容をまとめ、ホームページで公開をおこなった。

2. 今後の取組み継続に係る実施体制及び資金確保の状況について

本経費は、学外の競争的資金等によるプロジェクトで、プロジェクト実施期間終了後も引き続き取組みを継続するための体制を整備するために配分されたものです。本経費の支援期間終了後の実施体制及び資金確保の状況について記述してください。

本事業は、昨年度に続き「学内教育GPプログラム（継続型）」に採択され、以下の事業を今年度もひき続き展開していく予定である。

1. 授業・シンポジウムの実施・・・グローバルCOE期間中の教育と研究の成果を学生に還元するための授業をおこなう。“社会的格差と人間発達”をテーマとし、前期科目として“子どもの発達にみる格差：地域・学校・家庭”（全15回）、後期科目として“ジェンダーをめぐる格差の形成と構造”（全15回）を学部学生を対象として実施し、人間の発達過程におけ

る社会的格差の問題に対してセンシティブな視点を有する学生の育成をめざす。また前後期ともに授業最終回は学内公開シンポジウムとし、前期は、『世界の子ども・子育て格差』【基調講演者】浜野隆先生（人間文化創成科学研究科准教授）】という内容で、7月23日に実施予定である。

2. 子ども期の発達と社会的格差との関連に関する縦断データベースの管理・・・グローバル COE 期間中およびその後継続している縦断プロジェクトのデータを整備・統合して解析を進め、成果を発信する。

3. 人間発達研究を展開している国内外の研究拠点との交流・・・研究成果報告書の交換などの情報交流を進める。

GCOE 後継事業に対する学内 GP の申請は来年度で終了予定であり（来年度は「人間発達科学専攻研究発表支援事業（取組代表者：米田俊彦）」で申請予定）、平成 28 年度以降の活動については、今年度内に検討していく予定である。

学生への成果還元や学内外・国内外の関係者間の連携の維持発展、高度な研究成果に関する情報発信等、本事業で蓄積した実績と評価を活かし、事業終了後も、「人間発達科学」の国際的教育研究拠点としてさらなる教育・研究活動に取り組んでいきたい。